

●はなせ診療所そよ風だより No.47

2014年8月 内科 吉澤泰介

◎暑い日がつづく今日この頃ですが、皆さんお元気ですか。例年、ご当地恒例の、盆踊りや、火祭りも、今や準備たけなわと聞きます。ご苦労様です。熱中症に気を付けて無事やり遂げてください。

◎さて今回は、もう三十年以上前から、癌治療の行きすぎに対し、警告を発してこられた、2012年の菊池寛賞を受賞された近藤誠先生のお話です。先生の有名な『がんもどき理論』によると、癌には、すでに転移がある『本物のがん』と、転移してない『がんもどき』の二つがあり、前者は手術や抗がん剤で治療しても、すでに転移があるから結局治らない。後者は、転移がないから後遺症や手術による危険のある治療はかえって危険であり、無治療で放置しても構わないときっぱりと断言されています。ある症例では癌治療することが、かえって死期を早めてしまったり、ある症例では、無治療で自然経過でみていった方が、よいものがあると言っておられるのです。一貫して約30年前から、医学が、医者立場に立ちすぎて患者の方へ眼が向いていないと警告を発してこられました。先生の説には賛否両論があり、現場の医者たちは、それぞれの信念にもとづいて癌治療していると言えるというのが現状でしょう。

その先生の『医者に殺されない47の心得』という本の中に、「100歳まで働き続ける人生設計をする」という章があり、以下その内容が面白かったので掲載します。

今は、普通に100歳まで働く時代に入った。もう60代で、年金でのんびり余生をと、楽隠居モードになったら社会が持たない。本人もお荷物気分の毎日が、これから先40年も続くのはたまらない。ここ数年「死に方」の模索に関心が集まっています。「ボケたり、ねたつきりになって、家族に迷惑をかけたくない」「治療で苦しみにたくない」「胃ろう（胃にチューブから栄養を流し込む）されたくない。」と最晩年につらい思いをしないうための、死に方の模索です。——人類史上空前の長寿社会をこれから手探りで歩いていく僕たちは、発想を大きく変える必要があります。定年後も社会環境に「取り残されない」のではなく、「先取り」していく。「いつまでも元気に生きられるように」でなく、「働きつづけられるように」健康管理を心掛ける。今まで培ってきた人間関係は、「旧交を温める」のではなく「社会還元を活用」する。会社員時代の地位やプライドに「しがみつく」のではなく「忘れる。」——「2052年100歳以上の日本人が70万人」という数字をみて、お迎えを待ってたらしびれが来そうだと思い直し、人生の新しいステージを模索中です。

◎漢方薬に、当帰四逆加呉朱湯生姜湯（とうきしぎやくかごしゅゆしょうきょうとう）というのがあります。

1) 80歳の女性で、右そ徑部（足の付け根）が冷えると痛み、色々検査しても、どこも悪くなく、泣いておられた方がいました。前の医者もこの漢方を出していたがよくなり、（前医は1袋だけ出していた）1度に3袋飲むよう指示したら何年来の痛みがピタッと止まり喜ばれました。ここを通る、けっちん肝経という経絡（けいらく）があり、ここを痛がったらこの漢方薬が効くというくけつ（言い伝え）があります。

2) 18歳の若者で、体力ある若者でも夏場のトレーニングは激しく身体を痛めます。夏場クーラーつけず、夜寝てから、頭は暑いのに下半身が冷たいという。この漢方のむと、身体があったかくなるという。